

ようこそ校長室へ！

No. 107

令和7年1月21日

発行：貝塚敦

に にこにこ笑顔で

い いつもみんなで

つ 紡ぎ繋げる心で

に 日本一をめざすのだ

もっけい

我いまだ木鶏たりえず！

前号に続いて、大相撲ネタを。

太寿山忠明

皆さんお分かりかどうか定かではありませんが、当校出身の元関脇の大相撲力士です。ラグビーの稲垣啓太さん、野球の笠原祥太郎さん、女子ラグビーの原わか花さんなど、昨今、卒業生であるスポーツ選手が脚光を浴びてきた当校ですが、新津第二中学校の有名なスポーツ選手の先駆けは、この太寿山関だったことは疑う余地もありません。あの若貴関と同部屋の二子山部屋最隆盛時の一員であり、オールドファンには懐かしい、いぶし銀たる力士で、引退後も、日本相撲協会理事などの要職を歴任しご活躍です。

余談ですが、昨年9月6日に、地域在住の当校出身のお二人が、夏に開催した同窓会(1959～1960年生まれ)の会費が残ったので学校に寄付したいと来校してくださいました。聞けば、毎回の同窓会の主役は坂爪忠明さん。そう太寿山関のことです。その折、太寿山さんの気さくな人柄や、中学時代は実は卓球部に所属していたことなど、二人の仲の良い同級生からいろいろな話題を聞かせていただき楽しいひとときでした。

今の子どもたちは、最近は大相撲などテレビで観ることが少ないかもしれませんが、私が小中学校の頃は、テレビが最大の娯楽でしたので、それなりに大相撲も楽しみにしていました。

最も記憶が鮮明なのは、小学校の頃、近所の仲間たちと自宅の庭で遊んでいたら、祖父からいきなり声がかかって集められ、客間のテレビを縁側から大勢の友達と一緒に立ち見で観戦した横綱同士の優勝決定戦。まるでテレビが登場した頃の街頭テレビ、今のパブリックビューイングさながらの、今話題の琴櫻関の祖父の先代琴櫻関と、引退後名解説者で名を馳せ昨年未亡なくなった北の富士関の対戦に大盛り上がりとなりました。

その後、北の湖と輪島時代、千代の富士時代、若貴時代などを経ましたが、個人的にはいつの間にか大相撲も縁遠くなってしまいました。大人になるにつれ、テレビ視聴の機会そのものが減ったのはもちろんのこと、朝青竜や白鵬などの一強時代に興ざめた面もあるかもしれません。また、昔と比べると個性的な力士が少なくなってきた感のある大相撲に魅力を失ったのも一因だととらえています。

とはいえ、相撲は日本の国技として心からリスペクトしていますし、相撲のしきたりや力士の生き様には人生の教訓となることが多いものです。

後にも先にも最大の魅力的な力士といえば、実際の生の姿はもちろん知りませんが、何と云っても、不世出の大横綱、第35代横綱の双葉山関です。映像や写真で見るとその容姿は、威風堂々・筋骨隆々たる彫刻のような美しさとたくましさを併せ持ち、伝えられるその人間性・人格・品性たるや尊敬に値する角界史上最高の傑物だと思います。

この双葉山にまつわる、私が大好きな、特筆すべき有名なエピソードが2つあります。

エピソードの1つ目。

後に大横綱となる双葉山ではありますが、もちろん初めから強くて順風満帆の力士人生ではありませんでした。負けがこんで、なかなか勝ち星が積み上がらない状況が続き、その苦境を見かねた周囲の親方や力士仲間、後援者等が口をそろえて忠告しました。

「正面からぶつかるだけの正攻法の、いわば馬鹿正直な相撲ばかりとらないで、時には、立ち会い変化したり、いなしたり、頭をつけたりするなど、勝つための工夫をしたらどうか」と。親身になってアドバイスしてた周囲の人間に、双葉山はこう答えたというのです。

「ありがとうございます。でも、少しずつ、自分では通用してきているような気がするんです。本当にわずかですが手ごたえを感じるようになってきたのです。もう少し我慢して見守っていただけないでしょうか」と。

なるほど目先の白星、目の前の一勝にこだわるならば、いろんな取組の工夫や戦術はあったことでしょう。しかし、双葉山はそれをよしとせず、自分よりも大きい相手や番付が上の相手にも、正面

から堂々とぶつかり、がっぷり組み合って、正攻法の戦い方を貫き通したというのです。言葉通り、徐々に強い相手にも通用するようになり、大横綱に昇りつめました。

彼が見つめていた遠い先には、もっともっと高い目標や理想があったことなのでしょう。

2つ目のエピソード。

双葉山が角界史上不滅の69連勝の大相撲記録を樹立したことは有名ですが、70連勝ならず、で敗れたその日、知人に伝えた言葉があります。

それは「我いまだ木鶏(もっけい)たりえず」というものでした。これは、次のような中国の故事に由来しています。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★
昔の中国に、闘鶏(ニワトリ同士が戦う競技)を訓練する名人がいました。ある日、王様から一羽の鶏の訓練を仰せつかりました。

10日経って王様が「どうだ、そろそろ使えるようになったか」と尋ねると、「まだまだです。今は殺気立って、しきりに敵を求めています。」と答えました。

さらに10日経ち王様が尋ねると「いや、まだです。他の鶏の声を聞いたり気配を感じたりすると、たちまち闘志をみなぎらせてしまいます。」

さらに10日経ち王様が尋ねると「まだ駄目です。他の鶏を見ると、にらみつけたり、いきり立ったりしてしまいます。」

さらに10日経ち王様が尋ねると「もう大丈夫です。他の鶏がいくら鳴いても跳んでも叫んでも、動ずる気配もなく、微動だにしない、まるで木彫りの鶏のようです。徳が最大限に充実している証拠です。こうなれば、どんな鶏もかないません。姿を見ただけで逃げ出してしまうでしょう。」

そして実際に他のどんな鶏と戦わせても、他の鶏は戦わずして逃げ出したそうです。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

双葉山は、あれだけの大記録を残しても尚、自らの人間的未熟さ、力士としての力量不足を痛感し、無心の悟りの境地を極めようと、さらなる高みを目指す決意の一言だったと私は解釈しています。剣

聖と言われた、かの宮本武蔵に通ずるものを感じます。

この双葉山の2つのエピソードに、私が皆さんに常々求めてきた、一人間としてのあるべき姿が集約されています。それは、「感謝」「謙虚」「モラル」。双葉山ほどの大人物であろうがなかろうが、誰もがめざすべき、人としての理想とすべき心構えだと考えます。

さて、令和7年がスタートしました。今年も、「感謝」・「謙虚」の気持ちを持ち続け、「モラル」を遵守しながら、どんな困難にも正々堂々と誠実に立ち向かって生きていこうではありませんか。

ある知り合いの同僚教師のS先生は、中高時代は柔道部で大活躍しましたが、大学では一転、相撲部に入部しました。

「どうして高校まであんなに柔道がんばっていたのに、大学でいきなり相撲をやることにしたの？」と尋ねると、次のような答が返ってきました。

「だって、柔道は体重制だから減量が苦しくて辛くて。相撲は何でも食い放題。食いしん坊万歳！ハハハハ」と。この転向の動機は、理に適っているのか、それとも不純なのか。あなたは、一体どちらに軍配を上げますか？